

洛友会会報

京都大学工学部電気系教室内
洛友会
〒606-8501
京都市左京区吉田本町
075-753-5270
www.rakuyukai.org

新年のご挨拶

洛友会会長 北野 正雄



新年あけましておめでとうございます。洛友会会員の皆様におかれましては、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

このたび、洛友会会長に就任いたしました、北野正雄（1975年電子工学科卒業、小川研究室）でございます。2020年9月に京都大学を退職した後、現在は（公財）応用科学研究所と大阪大学量子情報・量子生命研究センターにて職務に携わっております。微力ではございますが、洛友会のさら

なる発展と、会員相互の交流活性化に貢献してまいりる所存です。で、何卒、皆様の温かいご指導ご鞭撻を賜りますようお願い申し上げます。

さて、皆様すでにご承知の通り、前会長の松本絃先生が昨年6月15日にご逝去されました。松本先生には、2020年度より洛友会会長にご就任いただき、特に新型コロナウイルスの感染拡大により、会合もままならない困難な状況下において、洛友会の中心として同窓会活動の維持・発展に多大なるご尽力を賜りました。

私個人にとりましても、大学3回生の学生実験以来、長年にわたりに折に触れてご指導ご助言をいただきました。ここに改めて、洛友会への松本先生の多大なご貢献に対し、深く感謝の意を表しますと

ともに、心よりご冥福をお祈り申し上げます。

昨年は、北川進氏（化学賞）と坂口志文氏（生理学・医学賞）の両氏にノーベル賞が贈られたことは、記憶に新しい喜びのニュースです。両氏ともに京大関係者であり、特に北川氏は本学の現役の理事、工学部・工学研究科のご出身でもあり、私たちに近い方々のご受賞ということで、喜びもひとしおでございます。

湯川秀樹先生が、日本人初のノーベル賞を受賞されたのは戦後間もない1949年のことでした。戦禍で荒廃しきつた世の中を、「ぱつと明るく照らすニュースだった」と、赤崎勇先生（2014年物理学賞）が京大生時代を振り返って語っておられたのを思い出します。湯川先生は、原子・分子の仕組みを理解するために生まれた量子力学を、全くスケールの異なる原子核の世界に適用するという大胆な発想で、中間子論（1934年）という新たな学問の地平を切り開かれました。これは、既成概念に囚われない自由な研究姿勢の成果に他なりません。

歴代のノーベル賞受賞者は揃って基礎研究の重要性を自らの体験に基づいて語っておられます。しかし、我が国ではこの有識者のアドバイスに真摯に耳を傾けた科学

技術政策が進められているとは言い難い状況です。この20年余り、「選択と集中」の名の下、競争的資金ばかりが積み増される一方、大学の基盤を支えるべき運営費交付金が削減され続けてきました。特に最近の物価高騰や急速な円安の影響を受け、多くの大学で教育研究活動の継続が立ち行かなくなりつつあります。

また、これまでわが国の大学のモデルとされてきた米国においてさえ、学問の自由が政治や経済の都合で脅かされるといふ由々しき事態が生じています。「潤沢な資金を目的とする研究に集中的に投入すれば、たちまち成果が出る」という都合のよい考えが蔓延していますが、影響力のある新しい研究は、豊かな学問の土壌があつて初めて花開くという本質が全く理解されていません。さらに、学問にとつて普遍性は命です。昨今の「自国ファースト」の流れは、国際的な連携や留学生の受け入れに悪影響を及ぼし、研究の発展を妨げかねません。留学生に対するハードルを上げるようなことは、あつてはならないと考えます。

長く続いたコロナ禍の時代を経て、一昨年あたりから、同窓会活動も徐々に再開されるようになってきました。私自身も昨年の秋には、中学、高校、大学の学年同窓

迎春

二〇二六年一月一日

本部役員

顧問 荒木光彦
会長 北野正雄
副会長 角田恭之
高野登志裕
松尾哲司

支部長

北海道 木元伸一
東北 伊藤篤
東京 安藤隆朗
北陸 笠原禎也
中部 松ヶ谷和冲
関西 西田篤史
四国 松本浩昌
中国 前田耕一
九州 工藤靖弘

本部幹事

和田修己
守倉正博
小嶋浩嗣
船戸充
下田宏
佐藤高史

会が相次いで開催され、改めて同窓会の重要性・必要性が再認識されたと感じております。

洛友会は京都大学電気系の同窓会ですが、その活動は、学年同窓会、企業同窓会、地域同窓会、インフォーマルなミニ同窓会など、多岐にわたるネットワークを内包しています。これらの有機的な結びつきこそが、同窓会の核心的な役割を果たしていると確信しています。

洛友会は、電気系の在学生も入学時から学生会員として登録されており、現役学生の支援にも力を入れていきます。「先輩と学生の交流会」の開催、「エレクトロニクスサマーカーンプ」への支援などがその主な活動です。特に前者については、11月祭の時期に懇話会と同日開催するという形式が、コロナ後の新たな伝統として定着しつつあります。

今後は、SNSなどのデジタルツールも積極的に活用し、世代、地域、専門分野といったさまざまな軸を通しての同窓会活動を、さらに盛り上げてゆく必要性・可能性を感じております。

会員の皆様には、この良き伝統ある洛友会が、現役の学生、卒業生、教職員の皆様にとって、より有益で魅力的な交流の場となるよう、是非とも活発なご意見・ご助

言をお寄せいただきたく存じます。

新しい年が、洛友会会員の皆様にとつて、実り多き一年となりますよう心よりお祈り申し上げます。新年のご挨拶といたします。



社会人四十周年

中国支部長



皆さま健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。

さて、前回(2022年4月号)の寄稿では、「中国支部のこれまでとこれから」と題して中国支部の歴史を振り返りました。今回は若手会員の皆さまの参考になればとの思いから、社会人40周年となっている私自身の経歴を振り返ります。

自己紹介

私は京都大学大学院修士課程を修了後、1985年4月に中国電力に入社。技術職、事務職、そして海外事業など様々な業務に携わり、現在は取締役監査等委員として経営の監査・監督に従事しています。

1960年12月に島根県松江市で生まれ、小中高と地元の公立校

前田 耕一 (昭58年卒)



を経て、1979年4月に京都大学電気系学科に入学。電気系に進んだのは、中学生時代に「初歩のラジオ」を読み、半田ごてを握ったの回路づくりを楽しめた体験があったから、だと思います。

研究室は原子エネルギー研究所(現在のエネルギー理工学研究所)。(故)服部教授、吉川潔助教を始めとする先生方、諸先輩にお世話になりました。就職先は、①研究・開発職よりエンジニアリング職が向いていると感じたこと、②会社技術の主役が電気・電子工学であること、最後に③地元とのつながり、という考えで決めました。

初期配属

初期配属は「広島電力所」という現業機関。5年間、水力発電所と変電所の保修、それらの運転・操作、新設・改修工事、と順番に担当しました。中でも、地下式の配電用変電所の新設設計から営業運転開始までの設計・施工監理を担当できたのは貴重な経験です。設計に必要な電力技術の知識と、用地・建築等の関連知識の習得。

実践はもとより、社内外との各種調整・手続き、資機材調達、予実算・工程管理等を担当することで、プロジェクト管理の基礎も学ぶことができました。大学の講義や教科書ではわからない現場・現物・現実を理解する時間でもありました。

また、海外調査の社内テーマ公募に応募。採択されて北米を3カ月回りました。Emailはない時代。手紙と電話で、最初の数は日本から事前のアポを取りましたが、後は荷物を持ってホテルを転々とし、訪問とアポ取りの繰り返し。懐深い時代の米州企業・現場に受け入れて頂き、一口に電力システムといっても、様々な設計思想、設備構成、運用方法、供給信頼度の考え方があって理解できました。

本社へ

最初は工務部(水力・送変電部門)で3年。電力所等の現業機関再編と配電部門との調整を含む業務分担・ルールの見直し、制御システムの再開発に関する計画を立案し、組合との調整・協議を経て、実施に移すまでを担当しました。現業経験が欠かせない業務でした。

次は経営企画室で2年。複数の電力会社が協力して発電所等を建設し、あるいは電力会社間で電力

を融通しあうための「広域運営」業務に従事し、他の電力会社の方々との接点もできました。

電気事業連合会工務部

1995年2月に出向。電気事業連合会は電力会社が会員の団体。当時の工務部は、各電力会社からの出向者10名程の組織で、原子力と系統運用関係の一部を除く技術関係分野をカバー。私は水力・変電と系統運用の業務の一部が担当でした。

この年は阪神淡路大震災がありました。地震被害情報の把握と耐震基準の検証・見直しの検討が最初の仕事でした。また日本の国際競争力確保策の一つとして電気料金水準の引き下げが政策課題となり、許認可制度のもと長らく地域独占が認められてきた電気事業のうち、発電事業への参入が原則自由化され、電気事業規制の見直しが本格化する初年度でもありました。各種の保安規制の見直しや規格・基準類の見直しへの意見出し・協議・調整、標準化活動や、送配電コストの分析と効率化の検討にも携わりました。

また、電力機器に欠かせないものの温室効果の高いSF₆（電気絶縁用）ガスについて、電力各社、ガス製造会社、機器製造会社と関係業界を跨いでのリサイクル方策づくりにも参加しました。京都で

のCOP3に先立つ先駆的な取り組みで、国際的にも認められ、現在も用いられている基本的なルールとなりました。

なお、世の中は狭いもの。上司となられた方々のうちお一方は、洛友会の先輩で、上述の広域運営業務でご縁ができた方だったこともあり、親身に指導頂きました。帰任。事務系業務にも従事。

1998年2月に経営企画室に戻りました。今度は供給信頼度とコストを考える設備投資・修繕計画の担当でした。また、2000年3月からの電力小売の部分自由化に備えた価格競争力の強化と新規サービスの検討、さらには法的に事業分割が求められた場合の影響や対策について検討するプロジェクトの事務局も務めました。

こうした中、計画管理制度への設備別・組織別の管理会計・業績目標の導入と、これを支えるデータ基盤整備・システム統合、制度会計上の四半期決算等への対応も合わせたERPシステムの導入を進めるため、2000年8月に経営企画室内の事務系の担当に異動。2001年2月からは、実務上のプロジェクトリーダーを務めました。

その後も中期経営計画の総括や、事業本部制等の導入、さらにはグループ企業の経営管理・経営

改善指導といった事務系職務に従事。不動産業や建設工事業、病院業といった他業種にも関わり、また、会社法や資金調達・与信管理に関する基礎知識も学びました。

2008年2月には、古巣の流通事業本部（水力・送変電・系統運用を担当）に異動。電力小売の自由化が進む中、コスト競争力確保で生じた歪みの補正も織り込んだ10年間の長期ビジョンを策定するとともに、取引先・協力会社とWin-Winの関係を作るSCM活動にも注力した2年半でした。

2010年に島根原子力発電所での点検不備が判明。原子力安全文化を醸成するため、社外有識者の意見や、原子力以外の部門の知見を取り入れるプロジェクトに異動しました。原子力は多くの規制要求があり、現状を変えにくい面があるものの、本社と発電所との分担や他部門からの支援などに工夫の余地もあり、そうした点を整理・提言し、また実施に移すための社内調整等に2年間携わりました。

2011年の東日本大震災は島根原子力発電所で勤務中のできごとでした。その後、定検中の1号機に加え運転中の2号機も停止。営業運転開始が近づいていた3号機の建設工事も中断となりました

た。原子力に求められる「安全」を改めて深く考えさせられました。

海外事業

2000年から電力小売自由化が段階的に進む中、多くの電力会社は海外事業への出資参画を進めていましたが、当社は島根3号機建設中で資金需要が高かったこと等から見送っていました。

2012年6月に事業開発部に異動。海外事業への出資参画を目指すこととなりました。十数年遅れの後発であり、体制づくりや案件発掘に時間を要しましたが、2015年に国際事業部門を設置し、2016年にマレーシアでの発電事業に出資参画してスタートとなりました。

海外事業は、電気事業を海外という別の市場で営むことから、技術的には大きな違いはない反面、法制度、商務契約、融資等では国内と大きな差があり、国際事業部門の役割は、リスク・収益性評価を含む事務系の専門性を持って、涉外業務を行うものでした。現在は、8カ国に持分出力約125万kWを持つ事業規模となりました。

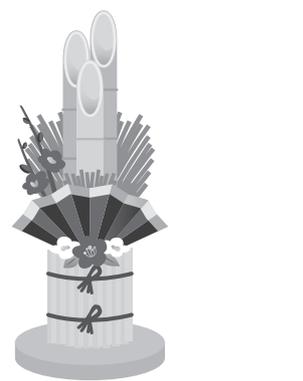
なお、コロナ禍で海外出張頻度が減った2021年度と2022年度に、縁あって近畿大学工学部で非常勤講師として「技術経営」

迎春
二〇二六年一月一日

公益財団法人
京都技術科学センター
理事長 田中 一義
副理事長 山田 啓文

公益財団法人
応用科学研究所

継
田中プリント



を担当しました。大学院で経営者のための技術活用学として開講されるのが一般的ですが、学部生を対象とする選択科目だったことから、経営が求める技術者の役割や経営知識の習得を目的としてシラバスを作成しました。研究・技術開発と商業化、経営業績・事業転換との関係や、特許等の知財、投資回収性や損益分岐点等の経済性評価、技術者倫理等を、企業の実例や身近な事例の引用、NHKプロジェクトXのビデオの活用等で、分かりやすい講義内容・教材とすべく注力しました。準備に半年かかりましたが、自身の勉強にもなりました。受講生の半数は、将来の職業選択や起業を考えている学生さんで、興味を持って聴講し、質問・相談等を頂いたのが印象的でした。

取締役監査等委員

2024年からは常勤の取締役監査等委員となり、経営の監査・監督を行う役割に就いています。会社法や金融商品取引法に基づく法的な役割を持つことから、日々勉強しながら務めているところであります。

結び

社会人となって大学・大学院で学んだ専門知識が直接役立つことは必ずしも多くないかもしれませんが。しかし、研究室で、「正解は

用意されてはいない。それに近づく努力と創意工夫が研究」、その手法が「仮説・検証アプローチ」、「必要な知識や情報は習うものではなく学ぶもの」と教えて頂いたことは、仕事でも極めて有効でした。また、学会や修論での発表に際し、「プレゼンテーション成功の鍵は、聴き手に自分がしていること、したいこと、その意義を伝えること。持ち時間の半分を使っても良い。」と指導頂いたことも、新しい業務を立ち上げる際に、理解者・協力を得るうえで大変有用でした。

改めて、ご指導頂いた先生方・諸先輩に感謝申し上げます。

教室だより

エレクトロニクス・サマーキャンプ報告2025

電気電子工学科学部生を対象に、夏休みを利用して電気電子工学の面白さ・奥深さを体験するイベント「エレクトロニクス・サマーキャンプ」を開催しました。最近では電子工作やプログラミングなどの経験をほとんどせずに入学してくる学生が増えています。彼らは、電気電子工学が身の回りのさまざまなところで利用されている

ことに思いが至らず、専門科目に対する興味や学習意欲になかなか火が付きません。学科として、この問題は極めて重大と考え、さまざまな取り組みをおこなっており、その一つがサマーキャンプの実施です。今年度のサマーキャンプは9月24、25、27日の日程で吉田キャンパスにて開催しました。1〜3年生を対象とし、単位は付与せず、学生本人が自主的に参加する形式を取っています。多くの方々のご支援をいただき、今年度で17回目の開催となります。

サマーキャンプでは与えられた課題に3日間をかけてじっくりと取り組み、創意工夫や試行錯誤を積み重ねます。明確なゴールを用意しないことで、参加者の数だけアイデアが生まれることもサマーキャンプの大きな特色です。キャンプと称していますが、実際に宿泊するわけではありません。ただ、時間を気にせず、仲間とコミュニケーションを密にしてキャンプの気分です。充実した時間を過ごそうという意味でこの名称を使っています。実際のところ、最終日前夜には何人かの学生が徹夜で製作・調整に取りくんでしまうのも恒例になりつつあり、彼らとそれに付きあったTAにとっては名実ともにキャンプとなっています。最終日にはコンテストという形で学生達

に成果を披露してもらい、優秀者には学科長名で賞を授与しています(後援の洛友会からは副賞として数千円の図書カードを贈呈)。

また、学部時代に参加してくれた学生が大学院生となり、TAとしてサマーキャンプの企画・運営として活躍してくれています。今年度は、13研究室から25名のTA(学部4年生、大学院生)が参加してくれました。学生TAが主体的になって企画・運営をおこなう姿は学部生にとっても良い影響を与えています。また、サマーキャンプに参加した学生が研究室に配属されるという話もよく耳にします。このように学生主体のイベントとして確立しています。各学年の課題は以下の通りです。

1年生「LEGO Mindstormsによるロボット製作」

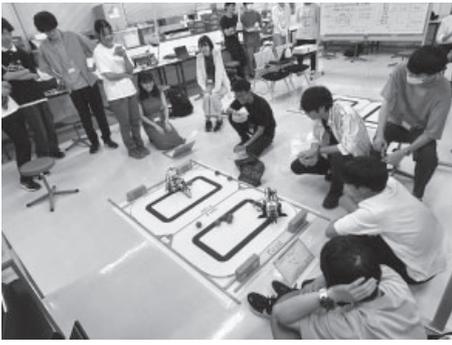


サッカーをベースとしたオリジナルの対戦競技で、マクスウェルが提唱した思考実験をヒントにした課題「マクスウェルの悪魔」を実施しました。ロボット機体としてはLEGO Mindstorms EV3をもちいて、それぞれが作成したプログラムにしたがって完全自律動作を行います。GUIベースとした専用のプログラム作成ソフトを使用しながら、カラーセンサをはじめとした種々のセンサを使いわけ、所望の動作をプログラムします。楽しみながらも電気電子工学の一端にふれることができ、1年生競技として10年以上継続しています。

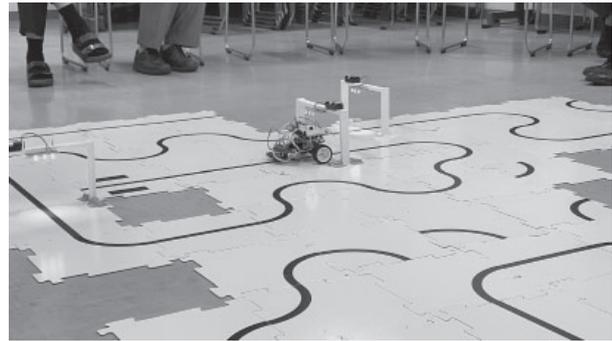
ルールは次のとおりです。まずコートをもつに分け、それぞれの陣地にゴールとなるフィールドを設定します。各陣地には黒色のラインを印刷してあり、このラインをトレースしながら、コート上に設置した赤球と青球を打ちわけいきます。赤球については敵陣へ、青球は自陣のゴールへと打ちわけるようにします。競技時間終了後、自陣に青球があれば1点加算、反対に自陣に赤球が残っていれば1点減点としました。また、青球を自陣のゴールまで弾けば2点加算、反対に赤球をゴールに弾けば2点減点とし、獲得点数で勝敗をきめました。

今年度は16名の参加応募があり、8チームに分かれてロボットの製作および自律動作プログラムを作成しました。3日目のコンテストでは、8組を2グループに分けたリーグ戦をおこない、それぞれのリーグ上位2チームによる決勝トーナメントにより順位を決定しました。1位から3位のチームを表彰するとともに、独創的な機体については「TA賞」としてそれぞれ表彰しました。今年度は全チーム2名1組での参加となったため、密に意見を交わしながら機体を作っていた様子が印象に残りました。全て見たえのある対戦でしたが、特に決勝戦はサマーキャンプの歴史に残るような大熱戦となりました。この決勝戦の様子は以下のリンクから閲覧することが可能です。

決勝戦の動画： <https://www.youtube.com/watch?v=invph6szXg8&list>



2回生「Arduinoを用いてライントレーサをつくらう！」



2回生は、C言語によるプログラミングや電気電子回路の基礎を学習済であることを踏まえ、それらを生かせる題材として、ワンチップマイクロコンピュータによる装置の設計・製作及び制御をテーマとしています。本年度も、TAを中心に独自設計したオリジナルのライントレーサを準備し、1人1台ずつ割り当てました。本テーマでは、コースのラインを検出し、そのラインに沿って機体を正確かつ速く動かす事が要求されます。コントローラにはArduinoを使用し、10種以

上のセンサを使用できるように拡張ボードを充実させています。センサによるラインの検出からマイコンでの情報処理、モータの制御に至るまでの一連の流れにおいて、電子工作・プログラミング両面での創意工夫や試行錯誤が求められるテーマです。

本年度は7名の学生から参加登録がありました。初日の朝には、実習を含むArduinoのセミナーをおこない、初日の午後から3日目の朝にかけて、各学生が自分のアイデアを実現すべく製作に取り組みました。2日目の午前、個人でライントレーサのベストタイムを競う予選を行い、本選であるチーム対抗リレーのチーム分けを行いました。本選では、赤外線通信を用いたバトンパスに加えて、各区間にLEDの色検出やパフォーマンス（ラインの途切れを検出し機体を回転させる）などの課題を設け、クリアできるとボーナスタイムを加算する工夫を取り入れました。チームおよび個人の走破タイムに応じて、最優秀賞、優秀賞、優良賞、区間賞を贈りました。

本年度はArduinoのバージョンが新しくなり、これまでの赤外線通信に加えて、新たにWiFi・Bluetoothが使えるようになりました。これらの

通信方式を使用するプログラムを自前で開発し、チーム対抗リレーのバトンパスに取り入れる等の意欲的な試みが見られました。TAの手厚いサポートもあり、スピードと課題のクリアを両立させた優秀な機体が数多く発表されました。



3回生「倒立振子の自動制御

「コンテスト」

本年度は、Vstone社製「ピュートバランサー2」を用いた倒立振子ロボットの自律制御コンテストを初めて開催しました。ピュートバランサー2はロータリーエンコーダとジャイロセンサ、速度センサを備えたシンプルな機

体で、限られた情報から姿勢や速度を推定する高度な制御が求められます。参加学生は前期講義で学んだ制御理論を基に、倒立制御の基礎から実践的なアルゴリズム構築まで意欲的に取り組みました。

競技テーマは「障害物レース」で、自立(15秒)↓直進↓曲道↓スロープ↓シーソー/急坂からなる難易度の高いコースに挑みました。14名の学生が5チームに分かれて短期間の講義・実習を行い、試行錯誤を重ねながらロボットの挙動を丁寧に分析して調整を進めました。

本番では、倒立したまま走行することに苦戦しながらも、独自の制御設計やチューニングによって着実な走行を実現したチームが多く見られました。特に優勝チームが全区間を完全踏破するという快挙を達成し、3回生とは思えない高い完成度を示しました。

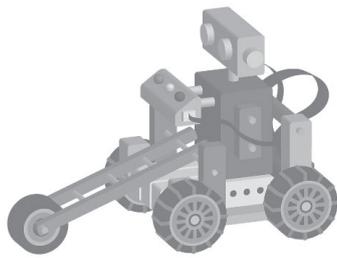
サマーキャンプは、座学で得た知識を実際のロボットで試すことのできる貴重な学びの場です。学生の粘り強い挑戦と創意工夫に敬意を表し、今回の経験が今後の学修や研究活動の糧となることを期待しています。

最後になりましたが、この場をお借りして洛友会のご支援に心から感謝します。また2016年度には、洛友会OBから電気電子工

学科へご寄付をいただきました。サマーキャンプの運営基金として使用させて頂いております。学科予算に限られる中、洛友会からの追加のご支援も頂いております。本サマーキャンプを継続できている状



況です。みなさまのご理解ご支援
 ございまして本年もかわらず実施
 することができました。また、サ
 マーキャンプ最終日のコンテスト
 は大変盛り上がりがあります。元気な学
 生達を見ると、こちらも元気に
 なってきます。卒業生同窓会とし
 てサマーキャンプ（初日や二日目
 でも大丈夫です）を見学してい
 たくことも可能ですので、見学ご
 希望がございましたら是非ご連絡
 下さい。また、コンテストの様子
 をオンラインで視聴できるように
 環境を整えておりますのでご希望
 の方はご連絡ください。洛友会の
 みなさまのお越しをお待ちして
 おります。



令和7年度電気系教室
 懇話会報告

懇話会報告

令和7年度電気系懇話会は、教
 員、学生、卒業生他80名程度の参
 加を得て、11月祭終了翌日の11月
 25日(火)に開催された。今年度は、
 昨年度に引き続き電気総合館1階
 の大講義室において開催された。
 同日は、午前中から「先輩と学生
 との交流会」が同じ電気総合館3
 階の中講義室と4階のラーニング
 コモンズで開催され、交流会に参
 加した学生の多くも懇話会に参加
 した。はじめに下田宏学科長が
 講演会に先立って挨拶された。そ
 の後、講師をお願いした高岡義寛
 名誉教授と松ヶ谷和冲氏（昭和
 62年卒）のお二方より、大変興味
 深いご講演をいただいた。ご講演
 の概要は以下の通りである。

「プラス・マイナス・ゼロ(±0)
 の世界と光・電子の誕生
 ～二刀流の研究生生活を省みて～」

高岡 義寛 名誉教授



京都大学名誉教授の高岡義寛先
 生にご講演いただいた。ご講演に
 先立ち、下田宏学科長から高岡先
 生のご略歴についてご紹介があっ
 った。

高岡義寛先生は、昭和49年3月
 に京都大学工学部電子工学科卒
 業、昭和51年に修士課程を修了さ
 れ、同年3月に東京芝浦電気株式
 会社（現・株式会社東芝）に入社
 された。昭和53年から京都大学工
 学部電気電子工学科の研究生とし
 て在籍され、その後昭和55年には
 京都大学工学部の助手として採用
 された。また、昭和56年6月から
 57年9月まで米国・IBMトーマ
 スワトソン研究所で客員研究員と
 して研究に従事された。昭和60年
 には京都大学工学部の助教授に昇
 任され、平成15年に京都大学大学
 院工学研究科の教授に昇任され
 た。平成28年3月に定年でご退職
 され、同年4月からは高野山大学
 の客員教授として務められている
 。

高岡先生は教員としてご活躍
 されている傍ら、僧侶としても活
 動されておられた。僧侶としては、
 昭和59年3月に大覚寺にて灌頂を
 受了し、同年10月に中僧都を補任
 された。昭和60年1月には西明寺
 の住職に就任されている。

ご講演のはじめに、本年6月に
 ご逝去された松本前会長に哀悼の
 意を表してご冥福をお祈りいたし

ました。

ご講演の前半は、イオン工学実験施設の歩みについて紹介された後、在職時代の研究内容についてご紹介いただいた。特に教授時代に行われた「液体クラスターイオン源の開発とその応用」について紹介いただいた。クラスターとは十数個から十数万個程度の塊状原子集団からなるナノサイズの微粒子であり、バルク状態とは異なる特異な性質を示す。固体、液体、気体、プラズマでもない新奇な材料として提案された。多種多様なクラスターをイオン化したクラスターイオン源が開発されており、高岡先生が在籍されていた高木俊宣研究室での研究を初めとするクラスターイオン源開発の歴史を紹介いただいた。高岡先生は、液体を原料としたクラスターからなるイオンビームの生成（液体クラスターイオン源）の開発にも取り組まれ、液体クラスターイオン源の生成原理や開発成果を紹介いただいた。一例として、アルゴンイオン単体を用いたイオンスパッタリングと比較して、エタノールや水を用いた液体クラスターイオン源を用いることで数十倍から数百倍の高効率スパッタリングが実現することを示された。今後の社会実装や研究進展に向けた研究課題として、クラスターイオン電流の大電流化

やクラスターサイズの高分離化もご提示いただいた。

次に、二刀流の研究紹介として、アインシュタイン博士の言葉を引用され、その言葉に触発されたとする「科学と宗教」についての思索についてご講演いただいた。密教の般若心経に説かれる「色即是空 空即是色」、万物は空（真空）の中から生まれ消えていき空そのもの、という考えが、宇宙論の一つである宇宙は真空そのものであるという仮定に通ずるという考えを紹介いただいた。宇宙には未だ未解明の部分が多く、そもそもその外から観測することは難しいため、宇宙がどのような姿であるかは「謎」となっている。そのような宇宙のあるべき姿の考察に、密教の教えが一つのヒントになるのではないかと、宇宙の誕生の起源を例に紹介いただいた。密教における空での「増益」と「損減」の繰り返しという概念をもとに、元はゼロの真空中で電氣的プラズマ・マイナスの場の揺らぎが生じることで宇宙や光が真空中から生まれたのではないか、というような考えを紹介いただいた。

最後に、心に多くの情報が入ってくるが、一度情報をゼロにした時に光が現れるのではないかと、とのお考えを示していただいたが、現代の情報過多の社会において重要な考えになり得ると感じ印象深く聞いた。

「自動車技術の進化」 EV, AD/ADAS, SDVと それを指させる要素技術

松ヶ谷 和沖氏

(株式会社デンソー執行幹部・
昭和62年卒)



株式会社デンソーの松ヶ谷様に自動車の電動化・自動運転・安全運転支援の展開と、CO₂排出や交通事故といった自動車における課題にデンソーがどのように取り組んでいるかについてご講演いただいた。ご講演に先立ち、下田宏学科長より松ヶ谷様のご経歴についてご紹介があった。

松ヶ谷様は、1989年に京都大学大学院電子工学専攻博士前期課程（修士）を修了されました。同年に日本電装株式会社（現・株式会社デンソー）に入社され、半導体結晶成長、高周波トランジスタ、マイクロ波/ミリ波IC、ミ

リ波レーダ、車車間/路車間通信システムの研究開発に従事された。2010年には研究開発3部長、周辺環境センサ、無線通信の研究開発をご担当されるとともに、名古屋工業大学大学院情報工学専攻博士後期課程（博士）を修了された。2015年には研究開発1部長、翌年2016年にはADAS推進部長と安全運転支援・自動運転に関わる次世代製品の事業企画と技術開発を担当された。2017年からは常務役員で欧州技術開発担当としてドイツに駐在され、2019年には執行職で北米技術開発担当としてアメリカに駐在された。2021年に執行幹部で日本の研究開発センターに帰任され、2022年には株式会社ミライズテクノロジーズ取締役に就任され兼務されている。

講演の冒頭では、デンソーが開発されたQRコードの紹介を交えて、デンソーの歩みとこれから描く展望についてご紹介いただいた。非常に便利で需要も大きな自動車であるが、その負の側面と言える環境問題や安全にも向き合い、CO₂排出ゼロ、交通事故死亡者ゼロという2つの大きなゴールを示された。その中の取り組みとして、自動車を取り巻く環境の変化や自動運転技術などを支える要素技術についてご講演いただいた。2035年頃に要求される自動車の姿の予想図として、1. 環境負荷を抑えるためのカーボンニュートラル化・リサイクルによる循環の形成、2. 自動運転(AD) / 安全運転補助(ADAS)を支えるクラウド接続によるソフトウェアの随時更新・センサの高機能化などが示された。上記を満たすため、動力の電動化(EV)が拡大し車載半導体の数も増大している。

環境という観点では、まず動力でのCO₂排出の評価としてWell-to-Wheelという考えを紹介いただいた。従来のタンクから走るまでのCO₂排出の評価ではEVがガソリンに比べ有利だが、発電・送電などのプロセスも含め評価する、より実態に即した評価方法でのCO₂排出削減について示された。また、消費電力の低減につながるSiCパワー半導体の作製や路面給電技術による長距離走行実現も示された。路面給電技術は、バッテリーに用いられるリチウム不足や特定資源への過度な依存を緩和することにもつながることが示された。

自動運転/安全運転補助(AD/ADAS)については、安全運転補助機能の普及状況に加え、より高度な自動運転に要求される技術についてご紹介いただいた

た。自動運転にはより遠方まで検知可能なセンサやソフトウェアの向上、自動運転用のインフラの拡充が重要であると示された。安全性という観点では今も議論が多いAD/ADASであるが、デンソーでは悪天候や様々な照明の光度が再現し実車走行試験が可能なテストコースを有し、実際のものに根差した評価をするということに強調されていました。

最後に、自動車を取り巻く環境の変化として、車載の制御系がマイコンからICに変わるとともに、ソフトウェアの重要性が増しており、ソフトウェアエンジニアの教育にも力を入れていることや、車載チップやシステムの規格化・標準化にも国際的に取り組まれている話をお示しいただいた。

講演会終了後、北部構内の生協食堂において「懇話会」および「先輩と学生との交流会」の合同での懇親会が行われた。洛友会会長の北野正雄先生が開始の挨拶をされ、およそ140名が参加する盛況な雰囲気の中で賑やかに歓談が行われた。最後は洛友会幹事長の和田修己先生に締めのご挨拶をいただき、名残を惜しみつつも時間の関係で解散した。



◎最終講義のご案内

令和8年3月31日付けで、山本衛教授が定年退職、黒橋禎夫教授が退職されます。左記の通り、最終講義を開催いたしますので、ご案内申し上げます。

山本 衛 教授 最終講義のご案内

日時：令和8年3月28日(土) 午後3時30分～午後5時00分

場所：宇治キャンパス 宇治おうばくプラザ きはだホール

題目：「リーダーや観測ロケットを用いて進めた大気圏・電離圏の研究」

申込フォーム： <https://forms.gle/MJX4TnPYs5G5c6>

連絡先：橋口 浩之教授

Tel：0774-3813819

Email： kinkenka@rish.kyoto-u.ac.jp

※対面で実施しますが、Zoomでも配信予定です。また最終講義の後、宇治おうばくプラザ ハイブリッドスペースにて祝賀パーティーを催す予定です。

黒橋 禎夫 教授 最終講義のご案内

日時：令和8年3月16日(月) 午後3時00分～午後4時30分

場所：吉田キャンパス 電気総合館大講義室

題目：「コンピュータがことばをわかるまでと、わかってから」

詳細案内： <https://mlpisticity.kyoto-u.ac.jp/?%E6%9C%AC%E6%9C%AC%E6%9C%AC>

連絡先：村脇 有吾准教授

Email： finallecture@mlpisticity.kyoto-u.ac.jp

※最終講義終了後に近隣で懇親会を開催予定です。

会員寄稿

関西万博でひょうごの魅力を発信したコドモに
伴走して感じたこと

中井 敦子

(平13年卒・関西支部)



2025年10月13日、無事に開幕を迎えたEXPO2025大阪・関西万博(以下「関西万博」)には、洛友会会員の皆様の中にも多数、来場・出展された方もおられたことと思います。我が家では、コドモが「兵庫県キッズ職員」として関西万博での発表に向けて約1年間かけて活動するという稀有な経験をさせていただきました。保護者として伴走して感じたことを、活動内容と合わせてお伝えたいと思います。

今回の企画は、兵庫県主催の「ひょうごフィールドバリエーション」を万博来場者へ紹介するものでした。兵庫県は「五国」と呼ばれる

撰津・播磨・但馬・丹波・淡路の

旧国名の地域から構成されており、

地域ごとに個性が異なります。

フィールドパビリオンは、各地の

地域を豊かにする取り組みをSDGs

体験型地域プログラムとして認定

し、兵庫県全体をパビリオンに見

立てて訪問していただく活動です。

この魅力をお届けする仕事」では、

公募で選ばれた兵庫県内在住・在

学で2025年度に小学5年生・

中学3年生になる24名のこども達

が、兵庫県万博推進局所属の兵庫

県キッズ職員として6つのフィー

ルドパビリオンを体験し、紹介し

たいと感じたことを万博会場で発

表しました。

訪問したフィールドパビリオン

は、①陶芸職人の仕事・丹波焼(丹

事つぶりでした。



万博会場での発表の様子

万博会場での発表は、5月に関
西パビリオン多目的エリアのス
テージで1・5時間にわたって行
われました。100名以上の来場
者を前にして緊張したのか、覚え
たセリフを忘れてしまうキッズ職
員へ小声で次のセリフを教えあう
等、助け合いながら無事に発表を
成功させることができました。最
後の活動は委託先のキッズニアが
主催する「こどもミライ祭り」で
した。こちらのイベントはEXPO
アリーナ「Matsuri」で開催
され、観客は1000人以上。発表
時間は20分程度と短かったもの、
俳優の伊原六花さんや芸人のなすな
かにしさんと共演し、なすなかにし
さんのボケでずっこける、というパ
フォーマンスも含めて、非常に楽し
そうに発表していました。イベント
の最後に当日の出演者(推定300

人)全員でフィナーレダンスを踊る
様子は圧巻でした。

コドモは中学3年生ですの

ので、学業との両立ができるかどうかが

気がかりでした。5月の会場発表

の翌日から5泊6日の修学旅行で

長野県乗鞍の山中を歩き回り、8

月のイベント翌日は3年間取り組

んできた自由研究を校内ゼミで発

表する等、学校行事も入り乱れて

慌ただしい状況でした。学校の課

題とこの活動の成果物の提出時期

が重なったり、他のキッズ職員に

気を使わずに自分がやりたかつ

た役割を譲って自分は縁の下の方

持ちに徹したり、ストレスを感じ

ることも多かったようでした。そ

んなコドモの様子をスタッフの皆

さんはあたたかく見守り、支えて

くださっていました。特に、スタッ
フの皆さんから厚い信頼を伝えて
いただいたことが、コドモにとつ
て自信につながったようでした。

をより知ることにしました。南

部に住んでいるとあまり訪れるこ

とのない北部の観光地への旅行

や、県内産の食品、特に但馬牛と

神戸ビーフを食べたいと、地元愛

が強くなったことは収穫でした。

また、私自身も、コドモがキッズ

職員としての活動中の待ち時間に

観光を楽しむ機会にもなりまし

た。特に、④⑤の活動の集合解散

場所の姫路駅から姫路城へ向かう

途中にある、ロボットが自動でそ

うめんを茹でてくれるお店を訪れ

たり、たまたま当日空気があった

ので⑥の活動のもとになった明石

海峡大橋の塔頂へ上る体験イベン

トに参加したりしたことが印象深

かったです。まさに、フィールド

パビリオンの狙い通りの反応をし
たわけです。

うな状況でした。

万博が終了し関西には少しずつ

日常が戻ってきています。しかし、

このような特別な経験を忘れてし

まうのはもったいないので、我が

家は今後も兵庫県や他の都道府県

の魅力を探す活動を続けていこう

と思います。



能ですり足を理由の説明中

エネルギー保存の法則

浅田 康介

(平17年卒・中国支部)



86cm。9月初旬に受診した人
間ドックで、メタボリックシンド

ロームの診断基準の必須項目である腹囲85cmをついに超えてしまった。血圧や血糖、血清脂質については、基準値を超過していないため、診断が下りたわけではないが、看護師さんからは会社で保健指導を受けることを予告された。

家に帰り、過去の人間ドックの検査結果を見ると、2年前前に比べて体重が4kg増加の68kg、それに伴い腹囲が6cmも増加している。体重1kg増加に対して腹囲が1cm増加するようなので、2年前は少し腹を引っ込めてチート測定している気もするが、それにしても増えすぎだ。私は下戸なので、酒の力を借りることなく、純粹に食べ物だけでやすく育ったということになる。心当たりと言えば、晩飯ではほぼ毎日米をおかわりしていたし、晩飯後にスナック菓子を1袋開けることもままあったというところか。正に、やめられない、とまらない。

即刻、減量を決意した。2年前の体重64kgに戻す。自信はある。過去にも体重がここまでではないが増えたときには、1ヶ月も食事制限をすれば2〜3kgは苦も無く落とせた実績がある。今回はこれまで以上に減らしシロがある分、楽勝だろう。信頼と実績の炭水化物抜きダイエットで、豆腐・

野菜・魚の鶏肉で食事を回す。YouTubeにダイエットレシピ動画が豊富にアップロードされているので、同じ食材でも色んなアレンジができて味に飽きないので便利だ。

1ヶ月が経過した。体重は1kg弱しか減っていない。私専用のダイエットレシピを余計に作ることを妻が許容するわけがないので、仕事を終えて帰宅後に毎日自分で晩飯を作る努力をしたにもかかわらず。自分の誕生日ケーキも固辞したにもかかわらず。

加齢に伴い基礎代謝が落ちたというところだろうか。有酸素運動を追加しよう。幸いにも、10年前に買ったピカピカのランニングシューズがある。毎日というわけにはいかないが、週に2回ウォーキング20分+ジョギング30分をすることにした。それに加えて、日々の通勤も少し工夫してみる。路面電車+バスのところを、帰宅時に自転車を使ってみることにした。シェアサイクルというサービスがあるので、好きなポートで自転車を借りて、好きなポートで自転車を返せる。私の自宅付近にはポートがないが、会社近くのポートから最大限自宅に近いポートまで自転車を漕げば、時間にして30分程度の距離になる。最初の60分は165円とお手頃だ。10月になっ

てもまだまだ暑かったが、夜になれば風が心地よい。帰宅時間帯は会社のある市内中心部の自転車は取り合いになるので、これまた週2回程度になるが。

自分なりに努力はしているものの、体重はマイナス1kg前後をうろろろしているだけで、思い描いた減量カーブにはなっていない。もう少し戦略的に進める必要がありそうだ。炭水化物が不足すると、筋肉のたんぱく質を分解してエネルギーを作り出す糖新生という状態になるらしい。そのような状態で有酸素運動を行うと筋肉の分解に拍車がかかるらしい。筋肉が落ちると基礎代謝も落ちる。何事も下調べが肝心だ。適度な炭水化物と多めのたんぱく質を摂取して筋トレをするのが良いようだ。

このようなことをインターネットで検索する頻度が高くなったからだろうか、何かにつけてトレーニンングジムのサジェスト広告を見る機会が増えた。入会金・事務手数料無料、会費も2ヶ月間無料というキャンペーンに運命を感じ入会。トレーニンングマシンの種類は多くないが、基本的なものは揃っており、服装も自由に会社帰りにフラットと立ち寄れる気軽さが売りなのだ。自宅の最寄り駅から徒歩1分の場所にあるのもよい。と

はいえ、革靴でトレーニンングするのはさすがに抵抗があるので、スニーカーで通勤することにした。トレーニンングシューズを靴に入れて通勤することも考えたが面倒だし、かと言って帰宅後にトレーニンングシューズに履き替えて再度ジムに出掛ける精神力も持ち合わせない。社内でも多数派ではないが、ビジネスカジュアルに移行している人も少しずつ増えてきている気がするのでよしとする。パンツもストレッチが効いたものにして、帰宅途中にそのままの恰好でトレーニンング出来るようにした。ジムに通い始めたこと、年内に体重を4kg落とすことを会社の同僚に宣言して、少しでもサポートにくい状況に自分を追い込む。高いプロテインも買った。ジムの中にあるキッズスペース(トランポリンや滑り台がある)を我が子が気に入る、土日は毎週のようにジムに行くことをせがんでくれるのも良い後押しになっている。

ジム入会から1ヶ月が過ぎた。体重は人間ドック測定時からマイナス3.5kgの64.5kgというところまで来た。あと一息だ。ここらで一つ、妻に腹囲を測定してもらおう。85cm。▲1kg▲1cmと聞いていましたか？

この数ヶ月間で私の体から消失した3.5kgの質量がどの部位

にあった何なのかは不明であるが、方向性は大きく外れてはいないと信じ、腹を引っ込めるのに効果的と聞くインターマッスルの鍛錬を追加して、まずは年末までの1ヶ月間トレーニンングを続けようと思う。年齢的にも、この機会を逃すと一生このままで終わる気がしている。2年前の体重に戻してOKではなく、志は高く、シツクスパックを目指して長期レンジで努力したい。

四国支部事務局の仕事と植物に囲まれた暮らし

美馬 圭介
(平21年卒・四国支部)



四国支部で事務局の担当を十一年程度務めております、美馬と申します。当支部の事務局の仕事としては、六月頃に開催する四国支部総会の準備、開催後の支部だよりでの報告、支部のお金・人員の管理、秋の見学会の準備(近年は開催できていませんが)に加え、「四

月に本部の事務局から、一般投稿への寄稿のお願いを受け、幹事と相談のうえ、支部内でまだ投稿していない方に一月の会報への寄稿をお願いする」という重要な役割があります。

本年は、その重要な役割を失念し、支部の誰にも依頼することのないまま師走に入ってしまったとして、自分で執筆させていたでいてる次第です。ということを取り止めのない話で恐縮ですが、私の住んでいる地域や、数少ない趣味である「植物育成」の魅力等について簡単に紹介させていただきます。

私は、現在、香川県の高松市でマンション住まいをしております。香川県は、気候としては「穏やかな瀬戸内海式気候で、一年を通して寒暖の差が小さく、日照時間が長く降水量が少ないのが特徴」といわれており、実際、近年の気象データによると、日照時間は全国十四位、降水量は四十四位、平均湿度は三十二位、最低気温は十九位（低い順）とのことですので、数字的にもそのとおりかと思われまます。

そういった気候のおかげか、植物の栽培に適しており（県庁所在地の高松市は松盆栽の日本一の産地です）、私も、今の家に住み始めてすぐ購入した植物が枯れずに

よく生長していきました。その後、育成を続けていくなかで色々メリットを実感できるようになり、気がつく、「家に植物を置き、世話をすること」自体が趣味になりました。

家に植物を置くことのメリットとしては、森林浴効果（心理生理的効果）、視覚疲労緩和回復効果、温熱環境調節・快適性向上効果などが得られるという点が挙げられます。植物は生育するなかで「フィトンチッド」という物質を放出するのですが、これが、緊張・うつ・怒りなどのストレス状態の改善、活気・活力などの意欲の回復、身体の痛み等の自覚症状の改善、血圧の低下、脈拍の減少、自律神経系の改善など、健康的で非常に有益な効果をもたらすようです。（これを利用してものが「森林浴セラピー」や「自然療法」であり、医療としても実用化されています。）

また、植物を室内に置く場合、蒸散作用により水分が放散され、快適な湿度にしてくれるという効果もあります。かつては冬場に加湿器を使用していたのですが、（私の使いが悪く）床を水浸しにしてしまったり、飽和するまで噴霧して窓の結露がものすごいことになったりしておりましたが、そのトラブルが解消されたのは結構な利点でした。さらに、植物を置く

ことにより緑視率（人間の視野内に占める樹木等の面積の占有率）が程よく高くなると、α波が増幅されてリラックスにつながり、植物の緑色が目に入ることによって眼精疲労が小さくなったりという実験結果もあります。それから、

これは、植物を育てることによる結果なのかはわかりませんが、植物の世話ができる人は「細やかな心配りができ、パートナーや友人に対して親切で優しい人柄と映ることが多い」、「計画性や責任感を備え、忍耐強く物事を続ける性格を持つことが多い」といった統計データもあるようです。また「観察力に優れている」ことも、植物好きな人の特徴の一つとされ、植物の葉や茎の状態、土の湿り具合、季節に応じた変化など細かい点に気を配ることと日常生活で他者の気持ちや環境の変化にも注意を払う性格がリンクする、という理屈のようです。

もちろん私は、前述のようなメリットを期待して植物育成を続けているわけではありません。部屋が無機質なもののばかりで殺風景だったため「何となく、オシャレだから」と二、三鉢購入したのが始まりで、その後のコロナ禍でのおうち時間の増加に伴い、植物沼にハマってしまい、一鉢、また一鉢…と買い増ししていきました。

（最終的に、マンションにもかかわらず九十鉢ぐらいに増えてしまいました。）

最初は、耐陰性・耐寒性・価格帯（枯れたときのショックの小ささ）を重視し、パキラ、シユロチク、ポトス、サンセベリア、フィカス、モンステラ、フィロデンドロン等、一般に「育てやすい、定番」とされる観葉植物から入門しました。それらは基本的に「適度に光を当て、土が乾いたら水をやる。鉢が詰まってきたら植え替えをする。」と単純作業だけで、ほとんど枯らさずに育成することができました。その後、育成のコツを掴んだ気になり「もう少し変わった高額な植物も育ててみたい」という気持ちになり、サボテン、ユーフォルビア、アガベ、パキポデイウム、オペルクリカリア、ドルステニアなどの多肉・塊根植物、サイカス、ディオーン、エンセファラルトスなどのソテツ（なお、現在最も気に入っているのがソテツです）、さらには、松、真柏、櫻、紅葉、梅などの盆栽や万年青など、日本古来の植物にも移行していきましました。希少だったり高額だったりする植物は、栽培が難しいものもあり、私自身、少し気を抜いただけで根腐れ・水切れ・害虫被害などで調子を崩し、相当な数の植物を枯らしてしまいました。そういった

失敗の経験も経て、現在はあまり枯らさずにキープできる状態に落ち着きました。



エンセファラルトスというソテツ（寒いので屋内育成中）

植物を育成するうえで勿論、メリットだけではなくデメリットもあり、具体的には「ハマってしまい、次々に新しい植物を買い漁ってしまい居住スペースが占領されてしまう」、「強光を欲する植物のためにLEDライト・サーキュレーター・植物棚などが必要となり、室内がさらにごちゃごちゃする」、「大事な植物を枯らしてしまつた際のショックが大きい」、「強風で鉢が倒れてベランダが惨状になる」（あと、冒頭のとおり、植物の世話に現を抜かし「洛友会の仕事を忘れる」ですかね）など、数えればキリはありませんが、それを補って余りあるメリットが植物育成にはあると思

ます。
皆様も、(なかなか今回の投稿で興味を抱いていただけか分りませんが)よろしければ部屋に一鉢、二鉢...と、家族から煙たがられない程度にほよい数の植物を置いてみて、QOLの向上につなげていただくと幸いです。

心温まる話

橋本 道哉

(昭33年卒)



心温まる話を2つ報告します。日本人は素晴らしいです。

私が時々会って話合いをする独居老人の85歳の年金生活者の知り合いがいます。彼が銀行から100万円を引き出して自宅に帰るときに落として無くしたので

警察に行ったら無くした100万円が届けてありました。届けてくれた人にお礼を差し上げようとしたら固辞され、1円も受け取らなかつたそうです。

日本人にはこんな立派な人が残っているのです。

私は、今年2年振りにコンサルタント事業を再開しました。青色申告会に会計ソフトをインストールしてもらったために、パソコンを担いで行きました。3年前までは担いなのですが今回はカートに乗せて散歩がてらに歩いて行きました。

途中気分が悪くなり、倒れそうになったので、道路の縁石に座って休んでいました。これ以上に悪くなれば救急車を呼ぼうと思いましたが、幾分気分が回復したので、通りがかりの70歳の女性に道順を尋ねました。彼女は分からないので通りがかりの70歳くらいの男性に尋ねてくれました。彼も場所を知らなかつたが、私が歩けそうにないのを見て、仕事の途中にもかかわらず、わざわざ有料駐車場に預けていた車を引き出して連れて行ってくれたのです。彼女も私が車に乗るまで付き添って見送ってくれました。青色申告会からの携帯電話による誘導案内をしてもらいながら無事に到着しました。信じられない親切でした。お礼を言ったら彼らは我々もいずれ若い人にお世話になるのだからお互い様だと言って名前も告げず去って行きました。

助けてくれたお二人は30分以上

も費やして見も知らぬ私を助けてくれたのです。涙が出るほど嬉しかったです。青色申告会の皆さんと家内に報告したら信じられないと言って吃驚していました。日本にはこんな親切な人が残っているのです。彼らの親切が無ければ途中で倒れて約束通りには到着できなかつたと思います。



同窓会だより

洛友42会 開催報告

2025年11月13日、JR東京駅至近の京都大学東京オフィスにて洛友42会を一年ぶりに開催しました。参加者は17名で、高松・岡山からの参加もあり、旧交を温める有意義なひとときとなりました。第1部は懇親会、第2部では4件の講演が行われ、内容の濃い会となりました。

第1部 懇親会

開催に先立ち、級友物故者18名のご冥福を祈り、黙祷を捧げました。続いて開会挨拶、乾杯の後、人形町今半の折詰弁当を囲みながら近況報告を行いました。(写真1)



写真1 懇親会の様子

- ① 話題は多岐にわたり、再発行までの実体験
 - ② 「今動かずして明日はない」との行動原則
 - ③ 自転車走行中の転倒経験
 - ④ 終活に関する注意点
 - ⑤ デイトレードの成功例
- など、有益で興味深い話が相次ぎ、終始和やかな雰囲気にも包まれました。

第2部 講演会

4名の方から、多彩で示唆に富む講演が行われました。(写真2)



写真2 講演会の様子

- ① 「京大電気版プロジェクトX」(間宮)

科学技術庁在籍時に、重粒子線がん治療装置(量子科学技術研究開発機構)および3次元振動破壊実験施設(防災科学技術研究所)の2件のプロジェクトを実現させ

た経緯を紹介。自ら将来価値を見極め、実現に向けて尽力した過程はまさに「プロジェクトXであり、貴重な裏話が披露されました。

② 「日本におけるコロナの感染経路・感染者数と区間再生度数の推移」(松田)

新型コロナウイルスの感染は、感染者の生活圏における人口密度と密接に関連するとの分析を紹介。人口の大都市集中を緩和し、地方分散を進めることが、将来のパンデミック対策として有効であることを示唆する内容でした。

③ 「グライダーでの標高の富士山越え」(古賀)

長年楽しんできたグライダー飛行について、速度を音で判断できるほどの経験を基に、富士山の標高越えに挑んだ3・5時間の飛行、そしてフルスピンへの挑戦を紹介。迫力ある映像と卓越した操縦技術に、参加者一同魅了されました。

④ 「日本の技術・工学を考える」(仁田)

1992年をピークに理工系志願者が減少して以降、日本の科学技術やものづくりが停滞している現状を分析。伊能忠敬や高橋至時を例に、日本は本来、教育効果が高く創造性に富む国であると強調。また、日本の技術の特徴として「モノづくりのシステム構築の

巧みさ」を挙げつつ、技術者と技能者の区別が曖昧であることが課題と指摘。京大の「評価されない研究でも自由に取り組ませてくれる」文化にも触れ、結論として「温故知新を逆に考える——新しいことから古きを知るべし」との示唆に富むメッセージが語られました。

閉会挨拶、記念撮影の後、盛会のうちに散会となりました。(写真3)



写真3 参加者全員の集合写真

なお、本会の開催にあたり洛友会より補助金を賜り、また会場の京都大学東京オフィスには多大なご協力をいただきました。ここに厚く御礼申し上げます。

來山征士記

洛友会(京都大学電気・電子工学科) 昭和35年卒 クラス会の報告

令和7年11月26日、深秋の好天に恵まれた京都でクラス会を開催した。正午に本校正門に集まった諸君は13名。昨年4月の京都でのクラス会以来の開催であった。毎度のことながら、関西組の藤、三島、藤田、近藤君および東京組の安達君の周到なアレンジにより、12時にマイクロバスで時計台を出発した。

まず訪れたのは一般には非公開の湯川秀樹博士記念館「休影荘」。下鴨神社にほど近い閑静な住宅地に位置する旧湯川邸は所有者たる長谷工コーポレーションが、安藤忠雄氏の設計により記念館として整備したうえで、2021年に京都大学に寄贈したものである。

湯川博士が昭和18年以降の期間スミ夫人と共に過ごされた居間・書斎・お庭などの私生活空間を1階に保存しつつ、2階を迎賓館風に追加した見事な設計である。在りし日の博士はこの和風で簡素なお庭の佇まいを眺めつつ自然の摂理に深い思考をめぐらされたのであろう。書斎コーナーには、博士が1943年度受賞された文化勲章や1949年度ノーベル物理学賞のメダルなど、そして博士愛用の

品々も。さらには戦後の冷戦時代に世界に向かつて発せられた良心、核兵器廃絶のためのラッセル・

アインシュタイン宣言関係の資料など。書棚には博士が戦中・戦後の厳しい時代にあつて執筆出版された何冊かの厚手の専門書が並ぶ。悲惨な戦争末期や終戦直後の時代にもこのような立派な本が出版されていたこと自体が筆者の大きい驚きであった。

思えば私達昭和35年卒業組は湯川博士と同世代の先生方から教えを受けて卒業した世代であり私達にとつて博士は歴史上の先生ではない。講義を受ける機会こそなかったが博士は私達がなつかしい学生時代を思い起こす象徴の人であることを実感させていた。

旧湯川邸をあとにして、お隣の下鴨神社境内を散策。そして、百万遍に引き返して京大総合博物館を見学した。学芸員を兼ねておられるご専門の先生方の直々のご案内で旧い地質時代の貴重な岩石標本・植物標本・古生物標本などの展示コーナーを丁寧に見学させていただき、また京都大学所蔵の貴重な古文書類を垣間見させていただき一同感激した。お世話いただいた博物館長高井正成教授、岩崎奈緒子教授、横山陽一副理事、岸本佳典財団常務理事の京都大学関

係者には厚くお礼申し上げます。



博物館を後にして百万遍交差点側から東山通りを南方向に臨む景色は銀杏並木の黄色一色に染まっていた。美しく懐かしい大学キャンパスを後にして、マイクロバスは三条臈上を経て山科山中の毘沙門堂へ。長い歴史を誇る天台宗のお寺とのことであるが、それ以上に京都でも屈指の紅葉の名所である。仁王門前に立ち、深紅に染まる夕暮れの境内を見渡す景色に一同大感激。

毘沙門堂の門前近くの料亭「長島」で会食懇談、そしてホテルに戻って恒例の二次会へ。京都大学に学んだことの幸運を集まった仲

間で共有できるクラス会は本当にありがたい。

昭和35年3月卒業以来65年を経た今、88歳米寿組の多くの仲間が先に旅立った。「生き残った我らは来年11月にまた京都で元気に再会しよう」と約して散会した。

安達哲夫、近藤康夫、榊博史、杉本友明、長崎治夫、西田武彦、長谷良秀、藤洋作、藤江孝夫、藤田泰弘、三木亮爾、三島温朗、山下耕市

参加者は右記の13名であった。

長谷良秀 記



35 洛友同窓会
会 場：2023年11月26日(土) 会 場：料理処 長崎(京都和山料理)
左から、敬称略 安達 西田武彦 長崎治夫 藤江孝夫 榊博史 杉本友明 三島温朗 近藤康夫
藤洋作 長谷良秀 安達哲夫 三木亮爾 山下耕市 藤田泰弘 榊博史

支部だより

九州支部昼食会報告

令和7年9月28日(日)12時より、福岡市博多区のオリエンタルホテル福岡博多ステーションにて、九州支部昼食会を開催しました。今回は9名の支部会員が参加しました。

昼食会は田口幹事(平成7年卒)の司会で進行し、冒頭に工藤支部長(昭和62年卒)より挨拶がありました。挨拶では、これまでの支部活動の協力への感謝に加え、各支部で若手会員の確保に苦勞している現状とともに、誰もが気軽に参加できる場をつくっていきたいという思い、そして九州支部のさらなる発展への期待が語られました。

懇親会は眞部さん(昭和43年卒)のご発声による乾杯でスタートしました。話題は大阪万博の感想、福岡国際空港の新たな取り組み、電力系統運用や高調波など多岐にわたり、特に大阪万博は1970年と今回の両方に参加された方もおり、当時と現在の違いや思い出話で大いに盛り上がりました。また、大学時代の単位取得にまつわる話は笑いが絶えない時間となりました。限られた2時間の中で話は尽きず、再会を誓うやりとりも

交わされ、温かな交流の場となりました。最後に、工藤支部長より本部総会の報告があり、川内野幹事(平成4年卒)による博多一本締めで閉会しました。今後も世代や地域を越えて、多くの会員が気軽に参加できる場をつくり、九州支部のつながりを大切にしていきたいと思ひます。

田中仁志(平22年卒) 記

洛友会関西支部 令和7年度交流会報告(9/29)

洛友会関西支部では、会員相互の親睦や交流を深めることを目的として、平日夜に開催する交流会や、ご家族もご参加いただける休日開催の交流会を毎年実施しております。

今回の平日夜開催の交流会では、講演会と懇親会を行いました。

前半の講演会では、関西大学経済学部教授 宇都宮浄人様をお招きし、「持続可能な交通まちづくり」をテーマにご講演いただきました。欧州で指針となっているSUMP(Sustainable Urban Mobility Plan)、ダウンズ・トムソンのパラドクス、SUMPを実践したウィーンの交通まちづくりの事例、宇都宮ライトレールの事例などについて、非常にわかりやすく、興味深いご説明をいただきました。



関西支部 講演会の様子



関西支部 懇親会の様子

題府 武史(平6年卒) 記

第123回関西支部 ゴルフ競技会報告

〈プレー状況〉
第123回関西支部ゴルフ競技会が令和7年10月18日(土)宝塚クラシックゴルフ倶楽部にて開催されました。
当日は雨が心配される天気予報でしたが、午前中に少し降雨があった程度で、午後からは時折心地よい風が吹き、プレーにはちょうど良いコンディションとなりました。アウトは伊藤氏(S34年卒)、インは平嶋氏(S38年卒)の始球式でプレーを開始し、合計19名(うちシニア7名)が最後まで楽しく競技に汗を流しました。
結果は次のとおりとなりました。(敬称略)

- (シニアの部)
 - 優勝 吉田 豊彦(S56年卒)
 - 2位 阿部 正之(S53年卒)
 - 3位 大澤 靖治(S44年卒)
 - (一般の部)
 - 優勝 三木 穂高(H26年卒)
 - 2位 佐伯 昭(S56年卒)
 - 3位 下田 一彦(H4年卒)
- また参加者は次のとおりです。
- (敬称略)
 - S34 伊藤 俊一
 - S38 平嶋 正芳

- S 44 大澤 靖治
- S 49 西 亨
- S 53 阿部 正之
- S 56 美濃 由明
- S 56 吉田 豊彦
- S 56 佐伯 昭
- H 4 下田 一彦
- H 7 一木 将人
- H 18 大和田 淳
- H 23 杉本 幸薫
- H 26 三木 穂高
- H 27 依田 学樹
- H 28 出口 樹
- H 29 藤田 秀眞
- H 30 喜多 謹仁
- H 30 前原 圭太
- R 3 遠藤 紘矢

〈表彰式〉

プレー終了後、一木氏(H7年卒)の司会により、表彰式が開催されました。

表彰式は伊藤氏(S34年卒)のご挨拶からはじまり、吉田氏(S56年卒)、三木氏(H26年卒)より優勝報告を頂くとともに、関西洛友会ならびにゴルフ競技会の更なる発展を期待するコメントを頂きました。

〈お知らせ〉

洛友会関西支部では同窓生の懇親を深める機会として毎年2回(春・秋)にゴルフ競技会を開催

しております。今回は令和8年5月16日(土)を予定しております。同期などお誘い頂くことで老若男女を問わず多数ご参加頂けることを心待ちにしております。

〈連絡先〉

一木 将人 (H7年卒)
藤田 秀眞 (H29年卒)
連絡先 070-2447-6134 (藤田)
fujitashumma@e3kansai-td.co.jp



第123回 関西洛友会ゴルフ競技会 参加者集合写真

中国支部行事報告

令和7年12月4日(木)、冬らしい冷え込みが感じられる中、7名の支部会員にご参加いただき、中国支部行事を開催いたしました。今年度は広島市に位置する造幣局 広島支局の工場を見学させていただきました。

造幣局では貨幣の製造を行っており(ちなみに、ご案内いただいた方からもクイズで説明がありましたが、紙幣は造幣局ではなく印刷局での製造となります)、広島支局では材料の溶解から、圧延、成形、圧印・検査まで全て行っており、工場見学でも様々な工程を見ることができました。

まず、造幣局の歴史や貨幣製造技術、勲章・褒章といった貨幣の製造以外の事業を含めた概要を映像で紹介いただきました。特に貨幣の偽造防止技術は興味深く、例えば、最新の500円硬貨に用いられている技術として、異なる金属をサンドイッチのように挟み込んだコアの円形部分を、さらに異なる金属のリングの中にはめ込むバイカラー・クラッドというものがあります。図解を見た範囲でも、高度な製造技術であると感じられました。その他にも、外周部分に微細な文字が刻まれている等、思わず手持ちの硬貨を確認してしま

う内容が多く、普段当たり前に利用している硬貨も、様々な技術に支えられていることが理解できました。

その後、実際に製造工程を見学させていただきました。具体的な製造の流れとしては、材料となる金属の塊を貨幣の厚さまで延ばし、円形に打ち抜いた後に縁の部分をつけ、洗浄、模様およびギザをつけ、最後に検査して計数・袋詰めとなります。印象に残った点として、圧延の工程では高温の材料がコンベアで移動しており、当日は冬で気温が低く、見学ルートが少し離れていたにも関わらず、熱気を肌で感じました。真夏であればさらに暑く、機器の操作等されている方の大変さが想像されました。また、円形の金属に模様やギザがつき、馴染みのある硬貨となるのですが、大量の硬貨が最終的に袋詰めされている光景を目にし、これらが多くの人の手に渡って経済活動を支えていると考えると、感慨深いものがありました。

造幣局 広島支局の見学後は、厳遊庭にて会食を行いました。今回は残念ながらご予約が合わない方もいらっしまったため、ごんままとした会になりましたが、久々に参加された方も含め、皆で近況報告等を行い、大いに懇親を深めました。

今後も多く支部会員の皆様に参加していただける行事を企画し、支部活動を盛り上げて参りたいと思いますので、引き続きよろしくお願いたします。



中国支部

伊藤 達理 (平22年卒) 記



◎「松本紘先生を偲ぶ会」のご案内

去る六月十五日にお亡くなりになられた松本紘先生を偲ぶ会を執り行いたく
左記の通りご案内致します

日時 令和八年三月二十日(春分の日) 午後一時より (正午開場)
場所 京都大学百周年時計台記念館 百周年記念ホール

主催 国立大学法人 京都大学
共催 国立研究開発法人 理化学研究所
公益財団法人 国際高等研究所

なお当日は平服にてお越しくださいますようお願い申し上げます 勝手ながら
らご供花などの儀は固くご辞退申し上げます また会場に駐車場はご用意し
ておりませんので公共交通機関をご利用ください
当日はZoomによる配信もおこないます

なお本偲ぶ会は登録制です
会場またはZoomでご出席いただける方は左記のホームページにて二月末
日までに登録いただきますようお願い致します

[出席登録(会場またはZoom)] [Google form: <https://forms.gle/XL53bFMd5XphAG96>]



問い合わせ先
京都大学生存圏研究所 小嶋浩嗣 携帯: 〇九〇一八二〇二一〇一八八九
E-mail: matsumoto-sensei-shinobukai@mail2adm.kyoto-u.ac.jp

訃報

昭27	野村 卓也	7
昭29	松村 和男	7・8・8
昭29	渡邊 宏	7・10・29
昭34	北村 元彦	7・10・12
昭35	伊達 允宥	7・8・13
昭40	内藤 勲	7・5・19
昭46	宮武 修	7・9・11

以上の方々がご逝去なさいました。
謹んで哀悼の意を表します。

